

糖尿病性網膜症のため中途失明した患者が社会復帰に至るまでの支援 ～事例を通して看護過程を振り返る～

The midway patient who loses one's sight supports the rehabilitation into society due to diabetic retinopathy.

東5階病棟 矢島ひろみ 原清美 小林智子 斉藤真奈美 大曾契子

要旨

中途失明した患者が社会復帰するまでの看護事例を経験し、コーンの危機理論に基づいて障害受容過程における患者の混乱状況と看護介入を振り返り検討した。その結果、患者は失明を辿る中で、防衛／回復への努力と悲嘆を繰り返して受容することがわかった。その中で看護者は患者の意識の変化を待ち、段階に応じた介入が重要である。

キーワード 中途失明 コーンの危機モデル 看護介入

1. はじめに

わが国では糖尿病の30～40%が糖尿病性網膜症を有し、成人期において中途失明する患者が増加している。現在失明する疾患では第2位、年間約3000人が失明していると言われる。当院において、昨年手術目的にて入院した患者の3人に1人が糖尿病性網膜症であった。

今回、糖尿病性網膜症で失明した患者が退院に至るまでに時間を要した事例を経験した。その中で、心理状態、生活訓練、社会資源の活用、社会復帰への支援など、様々な場面でどのタイミングでどのような支援をすればよいか迷うことがあった。その中で患者が視野障害を受け入れ、社会復帰に気持ちを向けるために看護師は医師、ソーシャルワーカー、リハビリ、栄養士など他職種と連携し、患者を支えていく必要性も体験した。

この事例を振り返り、中途失明した患者が社会復帰するまでの過程を、コーンの危機・障害受容モデルに基づいて障害受容過程における患者の混乱状況と看護介入を振り返り検討したため、ここに報告する。

II. 方法

1. 期間：2008年4月～2009年6月

2. 対象：A氏 38歳 男性 糖尿病性網膜症にて失明

3. 現病歴：平成19年糖尿病疑いあるが放置。徐々に視力低下、下肢の浮腫、感覚障害を自覚、低温熱傷を負ったが病院へ受診行動しなかった。平成20年3月身動きが取れなくなり入院となる。

社会背景：入院前より失業中。現在居住地は母親の家としているが、入院前は一人暮らしをしていた。キーパーソンの母親は、脳梗塞後遺症にて失語、半身麻痺、腎障害にて血液透析をしている。

4. 方法：質的研究とした。診療録を閲覧し、失明・今後への思い・イベント・看護介入を抽出した。コーンの危機・障害受容モデルを用いて言動を研究者間で分析し、危機モデルの枠組みとしてカテゴリーに分類し、看護介入を検討した。

5. コーンの危機モデル：障害を伴った患者が危機を乗り越え、長い時間をかけて障害を受け入れていくプロセスのことである。ショック、回復への期待、悲嘆、防衛／回復への努力、適応の5段階に分けモデル化したものである。

6. 倫理的配慮：本研究は当院看護倫理委員会の承認を得た。研究に当たり患者が特定できない表現を用い、また得られたデータはこの研究以外には用いず厳重に管理した。記録物は研究終了後にシュレッターにかけて処分した。

Ⅲ. 結果（表1参照）

A氏は入院から入院後1ヶ月間は失明に対する不安が大きく、「ショック」の時期とした。手術後しばらくして手動弁まで回復が認められたが、本人より症状や今後への不安の訴えが多く聞かれた。看護師はそれらの思いを受け入れる姿勢で話を聞いた。A氏は倦怠感が強く、自分から何もしようとはしなかったため日常生活はほぼ全介助で行った。

入院後2～3ヶ月では、4回目の手術を行い、また生活指導として糖尿病教室へ参加した。A氏より「糖尿病を知りたい」「何かやってみたい」という姿勢や視力回復への期待の言動が聞かれたため「回復への期待」の時期とした。この頃からA氏と相談しインスリン自己注射、階段の昇降練習を開始した。

入院後4ヶ月では、5回目の手術を行い、また反対の目が眼球瘻の状態となり毛様痛がみられた。痛みの持続や再び低下した視力、できると思ったことができない事実などからイライラし死ぬことを考えるなどの悲嘆的な言動が聞かれ、不安定な精神状態であったことから「悲嘆」の時期とした。この時期には、薬剤の検討やA氏と相談し毛様痛が軽減している時に外へ散歩に行くなど痛みの増減に合わせた生活リズムを作った。

入院後6ヶ月では、退院後の生活について具体的に話を進め、A氏が行ってみたいことが具体的

に聞かれるようになった。視力低下は進行していたが、リハビリの中で点字の練習をすることにより自分にもできることがあると認識し始めてきたので、「防衛/回復への努力」の時期とした。キーパーソンである母親は、月に1度程度面会にきていたが、障害があるため退院後の生活に関わってもらうことは期待できなかった。

入院後8ヶ月目には転院先の施設へ見学に行った。実際の施設での生活や訓練は想像していたものより厳しく、そのギャップを受け入れられず「悲嘆」の時期とした。A氏が医師や病棟・透析室の看護師、OT、MSW、栄養士、失明しボランティアにきている方など他職種と関わり、様々な面から話ができる場を設けた。また、歩行や下膳練習など具体的に転院先の状況を仮定し日常生活に取り入れることで、本人のギャップが軽減するように関わった。その結果、A氏から少しずつ転院や今後の生活への前向きな発言が聞かれるようになり、転院の準備を進めることができた。よってこの時期は「防衛/回復への努力」とした。この時期は、転院先の資料と一緒に読み合わせや、身の回りの物を整えるなど患者と共に準備を進め、入院後1年2ヶ月で転院となった。

表1

	状況	患者の言動	看護介入	コーン危機モデル
入院~1ヶ月	手術3回 視力:光覚弁→手動弁	眼が見えなくなってきたことがすごく不安 このまま両目とも見えなくなったら不安だ	傾聴 ADL 介助	ショック
2~3ヶ月	手術4回目 糖尿病教室への参加 歩行練習開始(リハビリ開始)	手術してもらえたら見えるようになるかな 色の濃い物なら見えるようになって嬉しい 俺はできる治療があればするよ 少しでも見えるようになって帰りたい せめて光がわかる状態でありたい	糖尿病の情報提供 リハビリ開始 インスリン自己注射練習	防衛/回復への期待
4ヶ月	手術5回目 眼球瘻による毛様痛出現	今こんな状況が嫌になっちゃった 受け入れなきゃいけないって思うけど時々死ぬことを考えちゃう 今は食べる事すら辛くて、何もやりたくなくなっちゃった	階段昇降練習 鎮痛剤や冷罨法での疼痛緩和 痛み軽減時に気分転換はかる	悲嘆
6ヶ月	転院先申し込み	点字とかパソコンとか学べればいいな。点字頑張ってみるよ 俺に出来る事を習得していずれは仕事できるようにになりたい	点字練習開始	防衛/回復への努力
8ヶ月	B施設へ見学	想像と違って正直行きたくないかも… 受け入れができない	本人が他職種と話せる場を設ける 転院先の状況を仮定しリハビリを日常生活に取り入れた	悲嘆
転院	転院決定 視力:右光覚弁	転院が近づき緊張してきたよ。スタートラインだね。	転院準備 転院先の資料よみ合わせ	防衛/回復への努力

IV. 考察：

小島は、コーンの障害の受容について、患者自身が障害の存在を認め、自己の能力の限界を現実的に認識し、なおかつ積極的に生きぬく態度をもつことであるとしている。²⁾

入院後間もない頃のショックの段階では、患者のそばに寄り添い不安の傾聴を主に行う看護介入が必要である。ショックの時期は障害を伴った直後と回復への兆しに一喜一憂しており、そばに付き添い、共感し、あたたかい誠実な思いやりのある態度で見守る事、患者の訴えなどをよく聴き、感情吐露を促すことが効果的であった。防衛／回復への努力の時期では、A氏は自分のできることが増え、失明に対する思いが変化し少しずつだが前に進むことができた。A氏は看護師からの働きかけのみに合わせて話を進めるとなかなか適応できなかった。そのため、本人の思いを否定せず納得するまで話を聞き、場合によってあたたかく見守り、時に現実認識を確実にし、励ましたり支えたり、情報提供や指導することによって積極的に障害受容に向かえるように援助した。今回の事例ではこのような介入が障害受容に効果的であったと考える。

本来、家族がキーパーソンになりうるが、A氏の場合は母親が介護を必要としている状況であり、母親から直接的な支援を受けることが困難であった。退院後の生活の場がなかったため、ソーシャルワーカーや市の職員も含め居住地から準備を行う必要があった。このような状況において看護師は、A氏の現在の状態と今後の方向性を把握した上で、他職種と連携をとれるように調整していくことが大切であると考えられる。

今回の事例から、患者が障害適応へ向かえるよう継続した精神的援助、生活の質を高める社会資源の活用、役割の修正・獲得への援助など新しい生活に踏み出せるように環境を整えていくことが重要である。

V. 結論

1. 失明を辿る中で、回復への努力と悲嘆、防衛／回復への期待の段階を繰り返して受容していた。
2. それぞれの段階に応じて、患者の意識の変化を待つ看護介入が重要である。

引用・参考文献

- 1) 嶺岸秀子 ラスト・アイの手術をする糖尿病性網膜症患者への危機看護介入モデル 群馬県立医療短期大学紀要 第5巻 109～118 1998
- 2) 小島操子著 看護における危機理論・危機介入 フィンク／コーン／アギレラ／ムースの危機モデルから学ぶ p65, 68, 70 株式会社金芳堂 2006年